

<講演抄録>1. 顎変形症患者に生じた顎関節内障について(第20回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)

著者	佐藤 修一, 川村 仁, 長坂 浩, 茂木 克俊
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	11
号	1
ページ	49-49
発行年	1992-06-29
URL	http://hdl.handle.net/10097/31411

第20回東北大学歯学会講演抄録

日時：平成3年11月22日(金) 午後4時30分

場所：東北大学歯学部B棟1階講義室

— 一般演題 —

1. 顎変形症患者に生じた顎関節内障について

佐藤修一, 川村 仁, 長坂 浩, 茂木克俊(口腔外科1)

良好な顎運動は、顎顔面の調和の下にいとなまれています。したがって、顎態および咬合の異常を有する顎変形症患者においては顎関節機能異常を生じることが少なくありません。今回われわれは、顎変形症に顎関節内障を生じた症例について報告しました。

症例1は、23歳の女性で、上顎咬合平面が右上がりの傾斜を示す顔面非対称が重度であるとともに、骨格型反対咬合を呈しておりました。開口時、左右顎関節の疼痛とクレピタスが認められ、開口度は30mmと開口障害がありました。顎関節腔造影検査により左右ともに復位を伴わない関節円板前方転位すなわちクローズドロックと診断されました。

症例2は、23歳の女性で顔貌は、口裂が右上がりに著しく傾斜し、オトガイ正中線が極度に右方に偏位しておりました。また、咬合状態は、右第一大臼歯から左第二切歯まで反対咬合がみられました。そして上顎歯列が右上がりを呈しておりました。開口時、左右顎関節の疼痛とクレピタスが認められ、開口度は30mmと開口障害がありました。顎関節腔造影検査により左右ともに円板の穿孔が認められました。

症例3は24歳の男性で、左第一大臼歯から右第二小臼歯までの開口がみられました。開口度は40mmで、開口時、下顎の左への偏位が著名にみられるとともに左右顎関節の運動時疼痛およびクレピタスが認められました。顎関節腔造影検査により右側では円板の穿孔が、左側では円板の癒着が認められました。

以上、顎変形症患者に生じた顎関節内障に対して、顎矯正手術と顎関節円板整位術を行い、経過が良好であったので、代表3例の病態および臨床経過について報告いたしました。

2. 上顎半側永久歯にみられた regional odontodysplasia の1症例

熊本裕行, 大家 清(口腔病理), 原田孝久(東北中央病院歯科)

Regional odontodysplasia は、隣接する数歯に限局性の歯の構成要素の発育異常を示す、非遺伝性・非家族性の疾患である。上顎左側に限局した1症例を経験したので報告する。

症例：12歳女児。現病歴：3歳児検診で上顎左側乳歯の萌出遅延を指摘され、12歳時に上顎左側永久歯の萌出遅延および形態異常を主訴として来院した。現症：1 2 は一部萌出し歯冠部に形態異常がみられ、1 根尖部歯肉に瘻孔形成がみられた。6 は近心移動を呈し、残根状態だった。X線像では、上顎左側永久歯全歯で ghost teeth を示した。処置：高度の感染をともなった 1 6 を抜去し、病理組織学的に検索した。

1：肉眼的には、顆粒状の歯冠表面を有する短根歯だった。組織像では、エナメル質表面に変性組織および歯垢を認めた。電顕的には、層板構造を有する同心円状の組織が認められた。エナメル質は菲薄で、表面の凹凸不正・小柱構造の乱れがあり、セメント・エナメル境は不明瞭だった。象牙質は一定の成長線まで球間象牙質の増加・細管の減少を示した。歯髄は広く、象牙粒の形成がみられた。セメント質は菲薄で、電顕的には基質の形成不全・埋入細胞の変性が認められた。象牙質齲蝕・歯髄壊死・根尖性歯周炎をともなっていた。6：象牙質は 1 と同様に一定の成長線まで球間象牙質の増加・細管の減少を示した。歯根部では細胞封入をとまなう骨様象牙質が広範にみられ、セメント・象牙境は不明瞭だった。齲蝕の進行により残根状態であり、歯髄ポリープをともなっていた。

本症例では、病因は不明であったが、疾病の限局性より、局所的な障害因子がある一定期間に作用したことが示唆された。